

レポーター・グリッド法を適用してとらえた 社会不安の特徴

阿部ひと美

早稲田大学大学院
人間科学研究科

今井正司

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部 早稲田大学人間科学学術院
早稲田大学応用脳科学研究科

根建金男

本研究は、パーソナル・コンストラクト理論 (Kelly, 1955) に基づいたアセスメント法であるレポーター・グリッド法 (Rep) を用いて、社会不安が高い者における個人的構成概念の特徴を検討することを目的とした。人間と環境との相互作用という観点から個人的構成概念の特徴を把握できる社会不安用 Rep を開発し、社会不安の高い大学生 18 名を対象に実施した。その結果、社会不安が高い者に共通していると考えられるエレメントおよびコンストラクトの特徴が明らかになった。さらに、社会不安の高い者のなかでも、その個人的構成概念はさまざまであることが示され、社会不安用 Rep における調査対象者の反応は、大きく 5 カテゴリーに分類された。今後は、Rep を用いることによって、社会不安の高い個人の特徴を、従来の質問紙法よりも詳細にとらえていくことが期待される。

キーワード：社会不安、レポーター・グリッド法、パーソナル・コンストラクト理論

問題と目的

社会不安 (social anxiety) とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」(Schlenker & Leary, 1982) である。社会不安については、標準化された尺度を用いた質問紙法によるアセスメントが特に盛んに行われている。質問紙法は、実施手続きが容易であるうえに、状態像を数量的に把握できるという利点があり、実証研究においても臨床場面においても広く活用され、メカニズム研究や治療に大きく貢献している。

標準化された尺度の多くは、Fear of Negative Evaluation Scale (Watson & Friend, 1969) や Social Avoidance and Distress Scale (Watson & Friend, 1969) などのように、不適切な行動や不

合理的な認知の頻度や程度を測定することや、Social Phobia Scale (Mattick & Clarke, 1998) や Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS; Liebowitz, 1987) などのように、特定の状況に対する不安感や恐怖感の程度を測定することが可能であり、状態像の把握において多くの利点がある。その一方で、それらの尺度の多くは、個人の認知的特徴や行動的特徴と社会不安喚起場面を別々に扱っており、社会不安の改善において重要であるとされる個人と環境との相互作用を把握するのが困難であることが指摘できる。そのような標準化された尺度の難点を補うためには、個人と環境との相互作用を把握できるアセスメント法を開発し、社会不安が高い者の特徴をより詳細に把握することが必要である。

環境との相互作用を把握できるアセスメント法として利用できるものの1つとして、レポーター

リー・グリッド法 (repertory grid technique: Rep) が挙げられる。Repは、Kelly (1955) によって開発されたアセスメント法であり、構成主義的なパーソナリティ理論であるパーソナル・コンストラクト理論 (personal construct theory: PCT) に基づいている。PCTの基盤である構成主義 (constructivism) とは、人は個人的・社会的現実を積極的に創造し、構成するととらえる認識論である (Mahoney, 1991)。PCTでは、「個人は積極的に環境を認識し、把握し、行動する」としており、個人と環境との関係性が重視される。Repは、個人的構成概念 (パーソナル・コンストラクト) を把握することによって、エレメント (構成の対象) すなわち環境と、環境を予測し、認知し、解釈する枠組みであるコンストラクト (構成概念) の関係性を探る方法とされている (Bell, 2003; Fransella, Bell, & Bannister, 2004)。一般的に用いられる質問紙法と比較すると、量的にだけでなく質的にも人の反応をアセスメントすることが可能であることが特徴である。

Repは心理学、教育、産業、市場調査など幅広い領域で用いられており (Fransella et al., 2004)、汎用性の高いツールであるといえる。臨床心理学領域においては、状態像の把握や介入の効果の評定など、さまざまな用途に使用されている (e.g., Feixas, Erazo-Cacedo, Harter, & Bach, 2008; Koch, 2006)。しかしながら、臨床心理学領域で用いるためには、従来のRepを改善する余地が残されている。具体的には、臨床心理学領域で用いられている従来のRepにおいては、エレメントに「父親」「親友」「恋人」などといった対人関係を設定したうえで、コンストラクトを対人認知に限定し、分析することが多い (e.g., Feixas, Moliner, Montes, Mari, & Neimeyer, 1992)。しかしながら、個人が置かれている環境には、状況の違いやそれに応じた他者からの役割期待・評価など、人以外にもさまざまな要素が含まれている。そのため、個人が置かれている環境を、「相手が誰か」といっ

た対人要因のみでとらえることは、社会不安者の現実的問題と結びつきにくく、彼らの現実構成を的確に理解するには不向きであると考えられる。また、「相手が誰か」という対人要因だけでなく、状況要因など人以外の要素も含めて構成される個人の置かれている広い意味での環境によって、対人関係や対人認知が変化することを考慮すると、対人要因に限定されない広義の環境との社会的相互作用を把握できるRepの開発が必要だと考えられる。

そこで本研究では、環境を、対人要因と状況要因を含む広義の環境として理解し、個人と環境との相互作用という観点から社会不安に特徴的な構成概念を把握するために、エレメントに対人要因および状況要因を含む場面を、コンストラクトにエレメントに示された各場面に関わる個人が示す社会不安に特徴的な徴候をそれぞれ設定した社会不安用Repを開発した。なお、コンストラクトに社会不安の徴候を設定したことで、エレメントに設定されているような場面と、その場面において個人が示す社会不安の徴候との関係性、すなわち、場面とその場面に関わる個人との相互作用を考慮した構成概念を明らかにできると考える。以上の論点を踏まえて、本研究では、社会不安傾向の高い者を対象として社会不安用Repを実施することで、社会不安の高い者が持つ、現実構成における個人的構成概念の特徴を明らかにすることを目的とした。

方 法

調査対象者

社会不安傾向の高い調査対象者を選出するために、大学生475名を対象に、Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS; Liebowitz, 1987) の日本語版であるLSAS-J (朝倉・井上・佐々木・佐々木・北川・井上・傳田・伊藤・松原・小山, 2002) を用いたスクリーニング調査を実施した。スクリーニング調査の有効回答者は461名 (男性237名、

女性222名、性別未記入者2名；平均年齢20.19歳、SD=1.72)であった。LSAS-Jの平均得点は48.52点(SD=24.92)であり、平均得点+1SDの得点は73.44点であった。そこで、LSAS-Jの得点が74点以上の者を社会不安傾向高群とし、社会不安傾向高群に該当する者に調査への参加を依頼した。そして、参加を承諾した者を調査対象者とした。

以上の選出過程を経た調査対象者は18名(男性7名、女性11名；平均年齢19.31歳、SD=2.24)であった。

調査材料

社会不安用Rep 本調査における社会不安用Repでは、15(エレメント)×15(コンストラクト)のグリッドを用いた(Figure 1)。グリッドは、行に配置したエレメントと列に配置したコンストラクトからなっている。エレメントには、先行研究や既存の社会不安尺度(e.g., LSAS-J；朝倉他, 2002；状況別対人不安尺度；毛利・丹野, 2001)より抽出した、社会不安症状を呈しやすいとされる15種類の社会的場面(例：初対面の異性と話す、権威のある人と話す)および社会不安症状を

呈しにくいとされる社会的場面(例：親しい友人と話す、友人に電話をかける)を設定した。コンストラクトの両極には、社会不安に特徴的な15種類の徴候と、それらとは対極的な意味を持つ状態を、先行研究や既存の社会不安を測定する尺度(e.g., Social Phobia Scale日本語版；金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野, 2004；Rapee, 1995)より抽出し、設定した。調査対象者には、15種類の場面それぞれについて、2つの対極的な語句を両極性スケールとした場合の当てはまる程度を、7件法で評定するように求めた。具体的には、社会不安に特徴的な徴候に当てはまる場合には、当てはまる程度に応じて、1点(非常に)、2点(わりと)、3点(やや)、どちらにも当てはまらない場合は4点(どちらでもない)、対極的な意味を持つ状態に当てはまる場合には、当てはまる程度に応じて、5点(やや)、6点(わりと)、7点(非常に)で評定するように求めた。社会不安用Repの得点が低いほど、社会的場面において社会不安に特徴的な徴候をより強く自覚し、得点が高いほど、社会的場面で社会不安に特徴的な徴候とは対極的な状態をより強く自覚していることを示す。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
	初対面の異性と話す	初対面の異性と話す	親しい友人と話す	親しくない人と話す	権威のある人と話す	人前で発表する	誰かを誘おうとする	授業中に先生に質問をする	グループの中で自分の意見を言う	友人に電話をかける	よく知らない人に電話をかける	学食やレストランで食事をする	重要な試験を受ける	親しくない人に頼みごとをする	盛り上がりつつある輪の中に入る	
A	緊張する															リラックスする
B	無口になる															よくしゃべる
C	苦手である															得意である
D	表情がこわばる															表情が自然
E	つまらない															楽しい
F	くちごもる															はきはきと話す
G	頭が混乱する															頭がはっきりしている
H	言いたいことが言えない															言いたいことが言える
I	消極的である															積極的である
J	難しい															たやすい
K	自信がない															自信がある
L	避けようとする															進んで取り組む
M	パニックになる															落ち着いている
N	態度がぎこちない															自然な態度
O	自分がどう思われているか気になる															自分がどう思われようと気にしない
	1点 (非常に)	2点 (わりと)	3点 (やや)				4点 (どちらでもない)					5点 (やや)	6点 (わりと)	7点 (非常に)		

Figure 1 本研究で用いた社会不安用Rep

手続き

調査への参加を承諾した対象者に対して、個別に実験室への来室を依頼して、対象者からインフォームド・コンセントを得た後に、社会不安用Repを実施した。実施の際には、対象者に社会不安用Repの回答マニュアルを提示したうえで、調査者（臨床心理学を専攻する女性大学院生1名）が口頭で社会不安用Repの回答手続きについて十分に説明した。回答の所要時間は20～30分であった。

分析

社会不安用Repの回答の分析には、ソフトウェアのRep IV (Windows XP用 Personal Version 1.11; Gaines & Shaw, 2005) を用いた。

Rep IVによる分析では、クラスター分析の手法が用いられており、以下の手順で結果が導かれた。①エレメントとコンストラクトのそれぞれについて、得点の分布をもとに、最も類似性の高い2つのクラスターを融合して1つのクラスターを作る、②①で作られたクラスターと次に類似度の高い他のクラスターを融合する、③クラスターが1つにまとまるまで②を繰り返す。

分析結果の出力では、階層的クラスター分析のように分類されたエレメントとコンストラクトのそれぞれが、階層構造を図式化したデンドログラムを構成した。それらの結果については、エレメ

ントとコンストラクトの配列および類似度の指標の観点から、エレメント同士の関係性、コンストラクト同士の関係性、エレメントとコンストラクトの関係性が解釈された。また、7件法で回答された各エレメント、各コンストラクトの得点の高低の分布が、色の濃淡で示された。

結果

社会的場面での社会不安が高い者における個人的構成概念の特徴を把握するために、社会不安が高い者を対象として社会不安用Repを実施した。その結果、社会不安が高い者に特徴的であると考えられる構成概念のパターンが示された。以下においては、まず結果の全般的傾向を把握したうえで、次に個別の事例について検討した。

社会不安用Repにおける反応の全般的傾向

社会不安の高い大学生18名を対象に実施した社会不安用Repの反応を概観したところ、人によって社会的場面における構成概念が大きく異なっているということが示された。すなわち、LSAS-Jにおいては「社会不安が高い」という同一のカテゴリに分類される者であっても、構成概念は個人によって異なるということが示された。

集団化したデータのエレメントごとの平均値をTable 1に示した。各エレメントにおいて、得点が低いほど、社会不安に特徴的な徴候を示す傾向

Table 1 各エレメントの平均値と標準偏差

エレメント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
	初対面の同性と話す	初対面の異性と話す	親しい友人と話す	親しくない人と話す	権威のある人と話す	人前で発表する	誰かを誘おうとする	授業中に先生に質問をする	グループの中で自分の意見を言う	友人に電話をかける	よく知らない人に電話をかける	学食やレストランで食事をする	重要な試験を受ける	親しくない人に頼みごとをする	盛り上がったっている輪の中に入る
M	3.43	2.68	5.69	2.69	2.64	2.38	3.15	2.58	2.89	4.57	2.49	4.46	2.37	2.50	2.76
SD	1.09	0.95	0.75	0.94	1.28	1.00	0.84	1.15	1.07	1.07	0.95	1.22	0.96	0.85	0.91

がより強く、得点が高いほど、それとは対極的な状態を示す傾向がより強いことを表している。15のエLEMENTにおいて、対象者18名の得点の平均値が最も高かったのは、「親しい友人と話す」であった。一方、最も平均値の低いELEMENTは、「重要な試験を受ける」であった。すなわち、社会不安の高い者にとって、社会不安に特徴的な徴候を表出しにくい場面は、親しい友人と話す場面であること、反対に、社会不安に特徴的な徴候を表出しやすい場面は、重要な試験を受ける場面であることが示された。

Table 2には、集団データのコンストラクトごとの平均値を示した。各コンストラクトにおいて、得点が高いほど、そのコンストラクトに配置された社会不安の徴候に当てはまり、得点が高いほど、社会不安とは対極的な状態に当てはまることを表している。対象者18名の得点の平均値が最も高かったのは、「つまらない-楽しい」であった。一方、最も平均値の低いコンストラクトは「自分がどう思われているか気になる-自分がどう思われようと気にしない」であった。すなわち、

社会不安の高い者にとって、社会不安の高まる場面において生じる特徴的な徴候は、自分がどう思われているか気になるという認知であることが示された。

個別の事例

調査対象者における個々の構成概念の特徴および従来の尺度ではとらえにくかった個々の反応の質的な側面を把握するために、分析ソフトウェアであるRep IVによって出力された、対象者の社会不安用Repにおける反応を個別に検討した。さらに、社会不安高者としての構成概念の特徴を明らかにするために、各対象者間において反応の類似点や相違点を比較・検討し、類似性が高いものをカテゴリとして集約した。具体的には、(a) 全体的な得点の分布や得点の高低 (Rep IVによる出力では、数値および数値の色の濃淡で示される)、(b) ELEMENTおよびコンストラクトの配列 (Rep IVによる出力では、ELEMENTとコンストラクトそれぞれの項目の配置順で示される)、(c) ELEMENTおよびコンストラクトの類似性の高低 (Rep IVによる出力では、デンドログラム

Table 2 各コンストラクトの平均値と標準偏差

	コンストラクト	M	SD
A	緊張する — リラックスする	2.68	0.94
B	無口になる — よくしゃべる	3.72	0.67
C	苦手である — 得意である	2.79	0.65
D	表情がこわばる — 表情が自然	3.31	0.91
E	つまらない — 楽しい	3.85	0.66
F	くちごもる — はきはきと話す	3.57	0.95
G	頭が混乱する — 頭がはっきりしている	3.49	0.73
H	言いたいことが言えない — 言いたいことが言える	3.18	0.73
I	消極的である — 積極的である	3.05	0.65
J	難しい — たやすい	2.86	0.68
K	自信がない — 自信がある	2.78	0.77
L	避けようとする — 進んで取り組む	3.08	0.63
M	パニックになる — 落ち着いている	3.37	0.65
N	態度がごちない — 自然な態度	3.15	0.70
O	自分がどう思われているか気になる — 自分がどう思われようと気にしない	2.47	1.12

左コンストラクトに当てはまる (非常に) (わりと) (やや) (どちらでもない) (やや) (わりと) (非常に)
 1点 ← 2点 ← 3点 ← 4点 → 5点 → 6点 → 7点

Table 3 社会不安用Repにおける調査対象者の個別の特徴

	カテゴリの特徴	番号	性別	年齢	LSAS-J 得点	社会不安用Repにおける個別の特徴
(1)	一般的に社会不安に特徴的な徴候を強く示す。	1	男	21	86	結果の個別の事例(1)およびFigure 2参照
		2	男	20	82	一般的に社会不安に特徴的な徴候を顕著に示したが、「つまらない-楽しい」コンストラクトは、ほぼすべてのエレメントで4点と評定されており、他コンストラクトと最も類似度が低かった。
		3	女	19	107	一般的に社会不安に特徴的な徴候を顕著に示したが、他者評価不安については社会不安に特徴的な徴候がみられなかった。
		4	男	27	77	「親しい友人と話す」エレメントのみが他エレメントと大きく乖離しており、「親しい友人と話す」エレメントを除いて、一般的に社会不安に特徴的な徴候を示した。
(2)	直接的な対人場面において、社会不安に特徴的な徴候ならびに社会不安に特徴的な徴候とは対極的な状態が混在する。	5	女	20	76	結果の個別の事例(2)およびFigure 3参照
		6	女	18	81	会話場面において、行動面では社会不安と対極的な状態を示したが、認知面・感情面では社会不安に特徴的な徴候を示した。
		7	女	19	93	会話場面において、一部の行動面・感情面では社会不安と対極的な状態を示したが、認知面では社会不安に特徴的な徴候を強く示した。また、すべてのエレメントにおいて、他者評価不安を非常に強く示した。
		8	男	18	85	集団場面やスピーチ場面では一般的に社会不安に特徴的な徴候を顕著に示した一方で、少数の会話場面では、一部の行動面において社会不安と対極的な状態を示した。
(3)	認知面・感情面では社会不安に特徴的な徴候を示すが、行動面では社会不安に特徴的な徴候を示しにくい。	9	女	18	88	結果の個別の事例(3)およびFigure 4参照
		10	男	19	80	特に認知面において社会不安に特徴的な徴候を示した。また、全体的にエレメント間の類似度が低く、場面によって思考や行動が異なる傾向が視察された。
		11	女	19	90	認知面・感情面において、社会不安に特徴的な徴候を顕著に示した。行動面においては、回避的な傾向はみられるが、パフォーマンスに関するコンストラクトでは、社会不安と対極的な状態を示した。
		12	男	19	80	認知面・感情面では社会不安に特徴的な徴候を示す場面であっても、行動面においては、社会不安と対極的な状態を示す傾向が視察された。
(4)	主張性を要する場面において社会不安に特徴的な徴候を示す。	13	女	18	80	結果の個別の事例(4)およびFigure 5参照
		14	女	19	95	主張性を要する場面では、社会不安の特徴を極めて顕著に示した。全体的に5~7点の評定が非常に少なく、ほぼすべてのグリッドが1~3点もしくは4点で評定されていた。
(5)	新奇性の高い場面において社会不安に特徴的な徴候を示す。	15	女	18	76	結果の個別の事例(5)およびFigure 6参照
		16	女	18	89	新奇的な場面では、社会不安に特徴的な徴候を顕著に示したが、それ以外の場面では、一部の感情面・行動面において社会不安と対極的な状態を比較的強く示した。また、すべてのエレメントにおいて他者評価不安を強く示した。
		17	男	18	82	新奇的な場面において社会不安に特徴的な徴候を顕著に示したが、それ以外の社会的場面においては、4点の評定が多くみられた。
		18	女	20	81	エレメントが大きく2つのクラスターに分類されており、社会不安に特徴的な徴候を示すエレメントと社会不安とは対極的な状態を示すエレメントが、比較的明確に弁別された。

で示される), という3つの観点から探索された各対象者間の類似点と相違点をもとに, 類似性が高いものをカテゴリとして集約した。分類は, 臨床心理学を専攻する大学院生2名(女性)が行い, 最終的に5カテゴリに大別した。著者らが知る限り, このような分類は先行研究における前例がなかったため, 両者で話し合っ合意を得ながら, 探索的に行った。各カテゴリに分類された対象者の個別の特徴を, Table 3に簡略に示した。以下においては, 各カテゴリにおいて見出された類似性の特徴を記述したうえで, 各カテゴリから1例ずつ, その特徴を顕著に示す反応例を提示した。

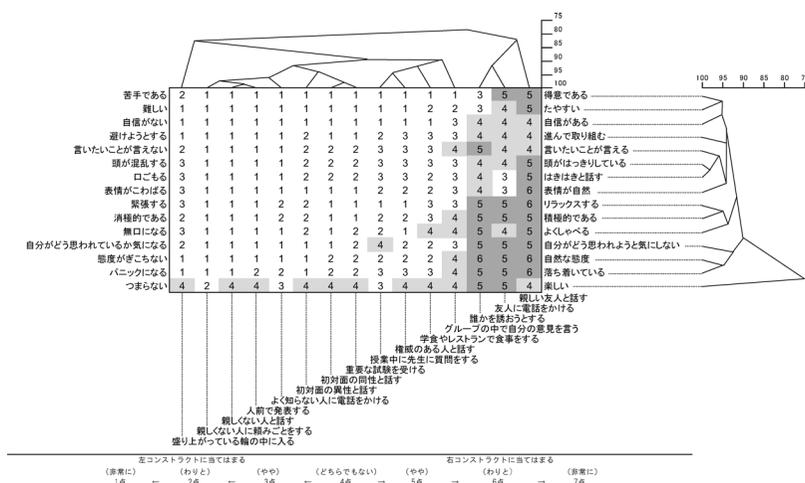
(1) 全般的に社会不安に特徴的な徴候を強く示す(4例)。

このカテゴリの対象者は, 社会不安に特徴的な徴候を表出しにくいとされる「親しい友人と話す」「学食やレストランで食事をする」といった, 1~3個の少数のエレメントを除き, 全般的に社会不安に特徴的な徴候を顕著に示した。さらに, コンストラクト間に大きな差異が見られない傾向

が観察され, 社会不安に特徴的な徴候を同時に幅広く呈しやすいたことが示された。

例: 21歳男性, LSAS-J得点: 86点(Figure 2)

本対象者は, 「親しい友人と話す」「友人に電話をかける」「誰かを誘おうとする」という3つのエレメントを除くほぼすべてのエレメントにおいて, 社会不安に特徴的な徴候を極めて顕著に示した。エレメントのデンドログラムにおいては, この3つのエレメントと残りのエレメントの距離が大きく開いており, 本対象者にとっては, この3つのエレメントの場面とそれ以外のエレメントの場面が, 大きく異なる場面としてとらえられているといえる。さらに, 社会不安の徴候を顕著に示した12のエレメントは, エレメント間の距離が近かった。したがって, これらの場面は, 本対象者にとって社会不安に特徴的な徴候を一様に喚起する, 類似した場面であるといえる。また, 本対象者におけるコンストラクトは, 「つまらない-楽しい」を除き, 距離が非常に近かった。したがって, 本対象者は, 社会的場面において, さま



注1: Figure 2は, Rep IV (WindowsXP用 Personal Version 1.11; Gaines & Shaw, 2005) による“Rep Gridgraphic plot of a Focus cluster analysis of the grid”の出力を改訂して表示した。

注2: 各エレメントとコンストラクトの得点の分布が3色で示されている(1~3点が白, 4点が薄いグレー, 5~7点が濃いグレー)。図上部のデンドログラムはエレメントの階層構造, 図右部のデンドログラムはコンストラクトの階層構造, デンドログラム上および横の数値は類似性の高低を示している。

注3: 注1と注2は, Figure 3~6についても同様である。

Figure 2 社会不安用Repにおける個別の事例(1)

ざまな社会不安に特徴的な徴候を、同時に多岐にわたって示しやすいことが示唆された。

(2) 直接的な対人場面において、社会不安に特徴的な徴候ならびに社会不安に特徴的な徴候とは対極的な状態が混在する(4例)。

このカテゴリの対象者は、いくつかのエレメントにおいては全般的にコンストラクトの得点が低かった一方で、「初対面の異性(同性)と話す」「親しくない人と話す」「権威のある人と話す」などの他者と1対1で会話をするような場面のエレメントにおいては、得点の高いコンストラクトと得点の低いコンストラクトが混在していた。すなわち、直接的な対人場面では、社会不安に特徴的な徴候と社会不安とは対極的な状態が混在する、という特徴が確認された。

例：20歳女性、LSAS-J得点：76点(Figure 3)

本対象者は、「重要な試験を受ける」「グループの中で自分の意見を言う」といったエレメントにおいては、全般的に社会不安の特徴を顕著に示した。その一方で、「初対面の異性と話す」「初対面の同性と話す」「誰かを誘おうとする」といったエレメントにおいては、一部のコンストラクトにおいて、社会不安とは対極的な状態を示した。す

なわち、これらのエレメントの場面においては、社会不安に特徴的ないくつかの徴候が生じるが、表情や頭の混乱の具合、苦手意識といった面では、社会不安に特徴的な徴候を呈しにくいといえる。また、コンストラクトのデンドログラムから、本対象者においては、各コンストラクト間の距離が非常に大きく開いている傾向が視覚的に観察された。この点からも、同一のエレメントの中でのコンストラクトの得点分布にばらつきがあることが示された。

(3) 認知面・感情面では社会不安に特徴的な徴候を示すが、行動面では社会不安に特徴的な徴候を示しにくい(4例)。

このカテゴリの対象者は、コンストラクトの中でも、「自分がどう思われているか気になる-自分がどう思われようと気にしない」といった認知面や「緊張する-リラックスする」といった感情面を反映したコンストラクトでは、多くのエレメントにおいて社会不安に特徴的な徴候をはっきりと示した。その一方で、「無口になる-よくしゃべる」「口ごもる-はきはきと話す」といった行動面を反映したコンストラクトにおいては、社会不安に特徴的な徴候を示しにくい、あるいは社会

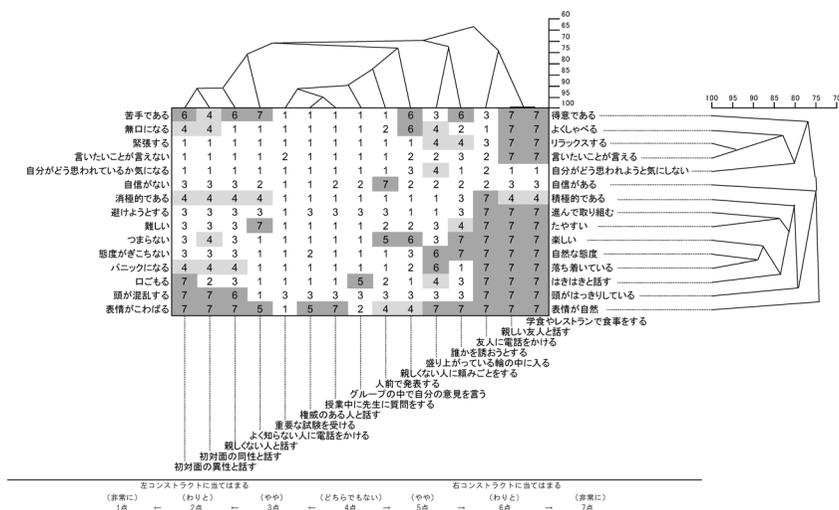


Figure 3 社会不安用Repにおける個別の事例(2)

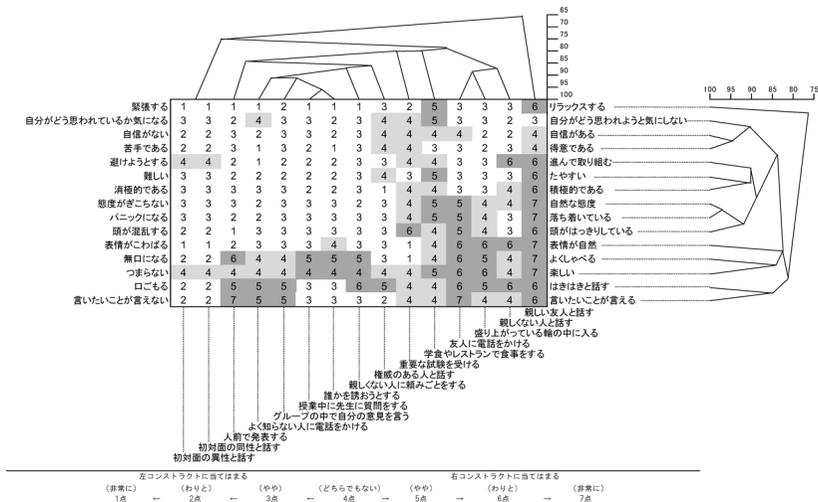


Figure 4 社会不安用Repにおける個別の事例 (3)

不安とは対極的な状態を示しやすい、という特徴が確認された。

例：18歳女性，LSAS-J得点：88点 (Figure 4)

本対象者は、コンストラクトの中でも、「無口になる-よくしゃべる」「口ごもる-はきはきと話す」「言いたいことが言えない-言いたいことが言える」といったコンストラクトにおいて、他のコンストラクトよりも得点が高い傾向が認められた。したがって、認知面や感情面で社会不安に特徴的な徴候を呈するような場面に置かれた際でも、主張的な行動をとることが比較的可能であるといえる。しかしながら、これらの主張的な行動に関連した3つのコンストラクトは、デンドログラムにおいて類似したものとしては分類されていなかった。したがって、この3つのコンストラクトはエレメントによって得点分布が異なり、同一の場面であっても、それらの行動をとることが可能な場合とそうでない場合があることが示唆された。

(4) 主張性を要する場面において社会不安に特徴的な徴候を示す (2例)。

このカテゴリの対象者は、社会的場面の中でも、「人前で発表する」「授業中に先生に質問をす

る」「親しくない人に頼みごとをする」などの、自分の意志や意見を伝達あるいは表明する必要がある場面において、社会不安に特徴的な徴候を顕著に示した。

例：18歳女性，LSAS-J得点：80点 (Figure 5)

本対象者は、「人前で発表する」「グループの中で自分の意見を言う」といった主張的な場面のエレメントにおいて、社会不安に特徴的な徴候を比較的強く示した。これらの場面では、緊張感や自信のなさ、回避的な行動、苦手意識などを共通して示した。その一方で、「初対面の同性と話す」「親しくない人と話す」「盛り上がっている輪の中に入る」といったエレメントでは、多くのコンストラクトで社会不安とは対極的な状態を示しており、社会的場面でも種類によってとらえ方が大きく異なるといえる。また、本対象者は、対象者全体で最も得点の低いコンストラクトであった「自分がどう思われているか気になる-自分がどう思われようと気にしない」において、15のエレメント中13のエレメントで4点以上の得点を示し、他者評価不安の傾向が比較的低い様子が視覚的に観察された。

(5) 新奇性の高い場面において社会不安に特

微的な徴候を示す（4例）。

このカテゴリの対象者は、社会的場面の中でも、「初対面の異性（同性）と話す」「よく知らない人に電話をかける」「親しくない人と話す」などといった新奇性の高い場面において、社会不安に特徴的な徴候を顕著に示した。

例：18歳女性，LSAS-J得点：76点（Figure 6）

本対象者は、「親しくない人と話す」「よく知らない人に電話をかける」といった新奇性が高い

と考えられる場面において、社会不安に特徴的な徴候を示した。これらの場面では、苦手意識や表情のこわばり、回避的な行動などを共通して示した。その一方で、「重要な試験を受ける」「権威のある人と話す」といったエレメントでは、社会不安に特徴的な徴候をあまり示さなかった。これらのエレメントでは、コンストラクトの両極のどちらにも該当しないことを示す4点が多くつけられていた。すなわち、これらのエレメントにおいて

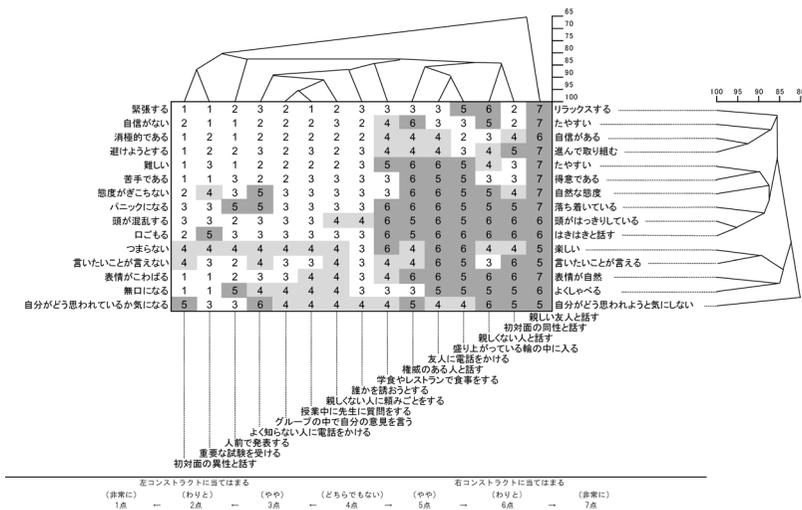


Figure 5 社会不安用Repにおける個別の事例（4）

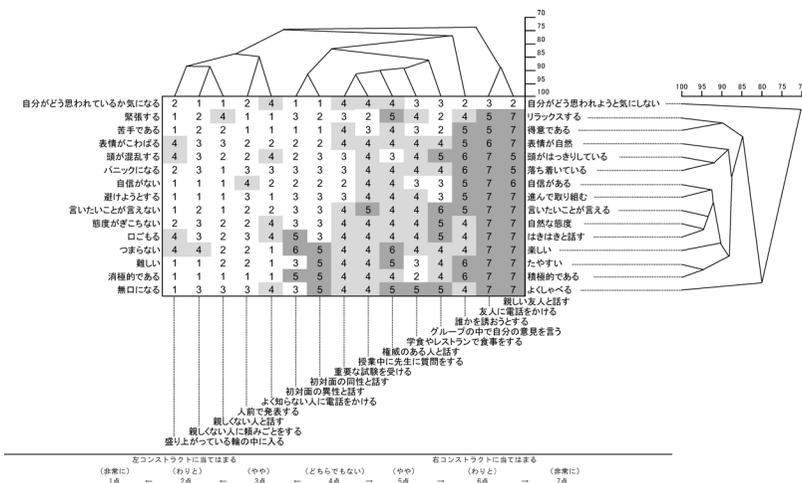


Figure 6 社会不安用Repにおける個別の事例（5）

は、社会不安用Repのコンストラクトで挙げた、社会不安に特徴的な徴候やそれとは対極的な状態があまり自覚されていないことや、本研究で扱われていないコンストラクトを用いて解釈していることが示唆された。

考 察

社会不安用Repにおける反応の全般的傾向

社会不安傾向の高い者を対象に実施した社会不安用Repの結果を概観したところ、社会不安が高い者に共通して特徴的であると考えられるエレメントおよびコンストラクトが明らかになった。社会不安の高い者のエレメントの特徴としては、社会的場面の中でも、親しい友人との場面においては、社会不安の徴候は喚起されにくいことが示された。社会不安は新奇場面や親しくない人との対人場面で高まりやすいとされているが、そのような知見と一致している。社会不安の高い者のコンストラクトの特徴としては、「自分がどう思われているか気になる」傾向が強いことが示された。社会不安の中心的要素は、「他者から受ける否定的な評価に対する不安（他者評価不安）」であるといわれるが（Beck, Emery, & Greenberg, 1985）、この知見と符合していると考えられる。このように、社会不安用Repにおける反応は、社会不安に関する先行研究の知見と整合することが示唆された。

個別の事例の検討

調査対象者における個々の構成概念の特徴を詳細に把握し、その相違点や類似点を比較するため、および従来の尺度ではとらえにくかった個々の反応の質的な側面を把握するために、各調査対象者の社会不安用Repにおける反応を個別に比較・検討した。その結果、LSAS-Jにおいて同程度の得点を示した者においても、その構成概念はさまざまであることが明らかとなった。すなわち、従来一般的に用いられてきた質問紙では「社会不安が高い」という同一のカテゴリにまとめら

れた者であっても、個人によって社会不安が高まりやすい場面や状況、その際に出現する社会不安に特徴的な徴候は大きく異なることが示唆された。具体的には、社会不安が高い者の中でも、あらゆる対人場面・社会的場面において、その場面と関わる自己が社会不安の徴候を強く示すと認識する構成概念を持つ者や、社会不安が高まりやすいと考えられる、会話等を要する直接的な対人場面において、その場面と関わる自己が社会不安の徴候だけでなく、それとは対極的な状態をも示すと認識する構成概念を持つ者、あるいは、対人場面・社会的場面ごとの差異は大きくないが、それらの場面と関わる自己が示す認知面・感情面・行動面での社会不安に特徴的な徴候については、示しやすい徴候、示しにくい徴候があると認識する構成概念を持つ者がいることなどが明らかとなった。

各対象者の反応を詳細に検討することで、個人に特有の構成概念の特徴が示され、社会不安に介入する際に個人の構成概念に合わせた介入を行う必要があることがより明確になった。また、どの場面でのどのような認知的特徴や行動的特徴を示すのかといった個々の反応における質的な側面も把握されたことから、介入対象者の状態像を詳細にとらえる必要があるカウンセリング場面でRepを活用することは、有益であると考えられる。個々の構成概念や状態像を量的・質的な側面から把握できるという長所を活かすことで、Repはカウンセリング場面において幅広い適用可能性があるといえる。

本研究の意義と今後の課題

本研究では、個人と環境との相互作用を把握するアセスメントツールとして、社会不安用Repを開発し、環境との相互作用の観点から、社会不安の高い者における構成概念の特徴をとらえた。社会不安用Repを用いることにより、社会不安の高い者全体としての特徴的な構成概念のパターンを把握できること、および個人に特有の構成概念

を把握できることが示唆された。すなわち、社会不安用Repは社会不安の高い者の認知構造や行動特徴を把握するためのアセスメントツールとして有用であると考えられる。また、社会不安のアセスメントにおいては、質問紙法に加えて、個性記述的な反応が得られるRepを用いることにより、社会不安が高い者の状態像を、量的および質的な観点からより詳細に把握することができると考えられる。

その一方で、本研究において見出された5カテゴリは探索的に得られたものであり、絶対的な分類ではない。そのため、属性の異なる者を対象にした場合やさらに多くの対象者からデータを収集した場合には、同様のカテゴリを得られなかったり、新たなカテゴリが生成されたりする可能性があり、この点は本研究の限界であるといえる。しかしながら、この5カテゴリは、社会不安が高い者における構成概念の普遍的な特徴として提示することを意図したものではなく、本研究において開発された社会不安用Repを用いることで得られるデータから、個人に特有の構成概念の特徴、すなわち個性記述的な側面を持つ知見が抽出可能であることを示したものである。今後は、さらに多くの対象者からデータを集め、社会不安の高い者としての特徴的な構成概念や個人の特有の構成概念を詳細に検討することが必要である。

さらに、本研究においては、社会不安用Repの結果は各エレメントとコンストラクトにおける反応の平均値の算出、および専用ソフトウェアによる分析結果の出力から質的に検討するにとどまった。しかしながらRepは本来、質的分析から量的分析まで柔軟に対応できるツールである(Fransella et al., 2004)。今後は、統計的解析に耐える指標を算出できる分析ソフトウェアを用いるなど、Repによって得られたデータをさらに多方面から検討する手法を確立し、より有用かつ実証的なアセスメント法として洗練させることが課題となる。

引用文献

- 朝倉 聡・井上誠士郎・佐々木史・佐々木幸哉・北川信樹・井上 猛・傳田健三・伊藤ますみ・松原良次・小山 司 (2002). Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS-J) 日本語版の信頼性および妥当性の検討 精神医学, **44**, 1077-1046.
- Beck, A. T., Emery, G., & Greenberg, R. L. (1985). *Anxiety disorders and phobias: A cognitive perspective*. New York: Basic Books.
- Bell, R. C. (2003). The repertory grid technique. In F. Fransella (Ed.), *The international handbook of personal construct psychology*. Chichester, UK: Wiley. pp. 95-103.
- Feixas, G., Erazo-Cacedo, M. I., Harter, S. L., & Bach, L. (2008). Construction of self and others in unipolar depressive disorders: A study using repertory grid technique. *Cognitive Therapy and Research*, **32**, 386-400.
- Feixas, G., Moliner, J. L., Montes, J. N., Mari, M. T., & Neimeyer, R. A. (1992). The stability of structural measures derived from repertory grids. *International Journal of Personal Construct Psychology*, **5**, 25-39.
- Fransella, F., Bell, R. C., & Bannister, D. (2004). *A manual for repertory grid technique*. 2nd ed. Chichester: Wiley.
- Gaines, B. R., & Shaw, M. L. G. (2005). RepIV (personal version 1.11). [Computer software]. Cobble Hill, British Columbia, Canada: Centre for Person-Computer Studies. <http://repgrid.com/RepIV>
- 金井嘉宏・笹川智子・陳 峻文・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). Social Phobia ScaleとSocial Interaction Anxiety Scale日本語版の開発 心身医学, **44**, 841-850.
- Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs*. 2 vols. London: Routledge.
- Koch, E. (2006). Personal constructs and psychodynamic psychotherapy: A case study. *Psychoanalytic Psychology*, **23**, 554-578.
- Liebowitz, M. R. (1987). Social phobia. *Modern Problems in Pharmacopsychiatry*, **22**, 141-173.
- Mahoney, M. J. (1991). *Human change processes: The scientific foundations of psychotherapy*. New York: Basic Books.
- Mattick, R. P., & Clarke, J. C. (1998). Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behavior Research and Therapy*, **36**, 455-470.

- 毛利伊吹・丹野義彦 (2001). 状況別対人不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究, **14**, 23-31.
- Rapee, R. (1995). Descriptive psychopathology of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press. pp. 41-66.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.

—2011.3.30 受稿, 2012.7.22 受理—

Characteristics of Social Anxiety Elicited with the Repertory Grid Technique

Hitomi ABE¹, Shouji IMAI^{2,3} and Kaneo NEDATE⁴

¹Graduate School of Human Sciences, Waseda University

²School of Human Care Studies, Nagoya University of Arts and Sciences

³Institute of Applied Brain Sciences, Waseda University

⁴Faculty of Human Sciences, Waseda University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2013, Vol. 21 No. 3, 203-215

This study examined the characteristics of personal constructs of individuals with high social anxiety using the repertory grid technique (the Rep), an assessment tool based on George Kelly's personal construct theory. Eighteen university students with high social anxiety completed the Rep for social anxiety, developed by the authors to elucidate the features of personal constructs from the perspective of the interaction between the person and the environment. The results revealed the features of the elements and constructs characteristic of socially anxious individuals. The responses to the Rep of all respondents were classified into five major categories. Furthermore, there were a variety of personal constructs in individuals with high social anxiety. The Rep seems to provide greater understanding about the features of individuals suffering from high social anxiety than ordinary questionnaires.

Key words: social anxiety, repertory grid technique, personal construct theory